

「何をして欲しい？」

大人になると、なかなか「何をして欲しい？」という問い掛けをすることも、してもらうことも、少なくなってきます。子どもには、よくするんですけどね。「何か欲しいものある？」とか「何かして欲しい？」とか。多分それは、子どもにそういう風に訪ねても、大抵の場合、そんな無理難題は返って来ないだろうという、大人の見立てがあるからでしょうね、きっと。「何か欲しいものある？」とか「何して欲しい？」とか尋ねても、せいぜい「アイス食べたい」とか「おもちゃ買って欲しい」とか。あとはまあ、「万博行きたい」とかそういうレベルの話で、叶えられなくはない要求だし、仮に叶えられなかったとしても、なんだかんだと理由を付けて断ることが、子どもに対してはできます。一方で、大人に対して、「何か欲しいものある？」とか「何して欲しい？」とか聞いてみようものなら、これは、もう鬼が出るか蛇が出るか・・・。「えっと、じゃあ、1週間くらい留守にするから、あとよろしくね」とか「前から欲しかった、これ、高いんだけど、いいかな」とか。ちょっとね、その要求の規模が予測できない、というね。多分、そういう事情があるから大人になるほど「何をして欲しい？」って尋ねてもらえないのだと思います。これは、親しき仲でも同じですね。別に疑心暗鬼になっているわけじゃないですが、「めっちゃ大変なお願いされたら、どうしよう」という、そういう偽れない懸念はあろうかと思います。

そんな世知辛い現実にあって、イエス様は臆せず仰るわけです、「何をしてほしいのか」と。もちろん、イエス様とて、なんでもお願い事を聞いてくれるわけじゃないでしょう。誰かを傷付けたり、平和を脅かしたり、愛を汚すような、そんなお願い事に対しては、毅然として戒められるかと思えます。イエス様が、ここで「何をしてほしいのか」とお尋ねになったのは、最初から、その願いを御存じであったからと見るのが良いかと思えます。二人の盲人の、その願いを初めから知った上で、あえて「何をしてほしいのか」と問い掛けられた。ある意味でこれは信仰告白でもあるでしょう。

主イエス・キリストを前にして、ちゃんと自分の願いを打ち明けられるのか、どうかという。

「自分の願いを打ち明けるなんて、簡単じゃないか」とも思ってしまいますが、でも、これなかなか難しいことでもあります。とくに、謙虚と常識を弁えた現代人である、私たちにとっては、願う前に「この願いは妥当なのか」とか「叶う確率はどれくらいか」とか、そういうことを考えてしまうのは、かなり避けがたいものです。「求めなさい、そうすれば与えられる」と教えられていても、「二人または三人で祈るところに、イエス様もいらっしゃる」と知っていても、いざ祈ろうとする時、私たちは、どうしても謙虚と常識に囚われて、ほどほどのお願いに留まってしまう……。そういうことって結構多いんじゃないでしょうか。

まして、誰かに叱りつけられたり、否定されたりしたら、どんなに切実な祈りであっても、私たちは差し控えてしまうことがあります。「そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、『主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ」……。はたして、ここまで一生懸命な祈りの叫びを私たちはしたことがあるでしょうか。そして、これからできるでしょうか。叱られても、黙れと言われても、なお主に届くように叫ぶような祈りをすることが、私たちは可能なのでしょうか。

確かに、この礼拝において、誰かが非常に熱烈な、叫ぶような祈りをされたなら、正直、私たちはビックリするでしょう。牧師が、急に手を大きく振り上げて、天を仰いで渾身の祝祷をささげたら、多分、ドン引きされるかと思います。何事も、そこに集まっている全員が了解し、納得している温度感や秩序があります。それを乱す祈りや賛美は、基本的には避けた方が良いでしょう。私たちがビックリさせて気付きを与えるのは、人ではなくて神様なので。

ただ、それでも、私たちが、この二人の盲人に見習えたらいいなあ、と思うのは、まず、一人じゃなくて二人であることに気付いて、勇気をもらうってことです。叶いそうもない祈りを捧げる時、一人孤独に祈るなら、それは寂しい苦行みたいなものです。でも、同じ祈りを持つ者が二人集まっ

て、祈るなら、それは、たとえ叶わなくても、少なくとも、友が得られる貴重な機会となるでしょう。この教会も、沢山の祈りを捧げます。比較的すぐに叶いそうな祈りから、私たちの寿命が持つ間には叶いそうもない祈りまで、色々、神様を信じて捧げています。でも、その一緒に祈り、そして、アーメンと言い合う関係性の中に、すでに神様の恵みが置かれていることには、気付いていたいですよね。祈りを合わせられる仲間がいるのは、本当に幸せなことです。

あと、祈る気持ちに制限を掛けないということも忘れないでいたいと思います。「祈ったって仕方ない」「祈るなんて愚かなことだ」「祈るくらいなら自分で何とかする」。いや、まあ、自分でなんとかできるなら、それに越したことはありません。でも、自分でどうにもできない時に、自暴自棄になったり、絶望したり、社会が嫌になってしまうくらいなら、祈る気持ちに制限を掛けず、叫ぶような祈りの言葉を吐き出した方が良いでしょう。うるさいと言われても、黙れと言われても、祈ったところで何の意味があると言われても・・・、自分の消せない気持ちを誰かに、社会に聞いてもらうことは、無駄ではないでしょう。その叫びは、必ず神様のもとに届き、そして、誰かの心に共鳴し得るものです。

ところで、今回の聖書箇所的主要人物が、盲人、つまり目の見ない人であるというのは、偶然ではありません。単に「見えない目が見えるようになった奇跡物語」ではない、ということです。この二人の盲人とは、私たちに対する、ある皮肉を込めた存在です。どういうことかと言うと、「あなたたちは目が見えるでしょう、知識もあるでしょう、聖書も良く知っているでしょう、でも、本当の祈りの力は知らないようですね、本当のイエス様のことは見えてはいないようですね、この盲人二人には見えていたのに」という、そういう皮肉です。この目の見えない二人は、目は見えないけれど、イエス様の本質と、信仰の力と、祈りの神髄をちゃんと見通していたということです。だから、叫ぶほどの祈りを捧げることができた。だから、その祈りは聞き届けられた。

私たちも問われています。その見える目で、ちゃんとイエス様のことが見えていますか、と。祈りの力が見えていますか、と。あと付け加えるなら、その信仰の先にある、光がちゃんと見えていますか、と。

ますか、と。「何をしてほしいか」と問われて、ただ黙っているのは、慎ましやかでも謙虚でもなく、主の権威を軽んじ、信仰者としての責務を放棄しているとも言えるかも知れません。私たちは、主を信頼し、日常の小さな願いから、世界の平和に及ぶ大きな願いまで、遠慮せず祈れば良いのです。遠慮なんかして、神様のことを常識の下に置いて、加減してほどほどに祈ることの方が、神様に失礼というものですよね。

せっかくイエス様が聖書を通して、わたしたちにも「何をしてほしいのか」と尋ねてくださっています。ここは一つ、自分の胸に手を置いて、自らの願いと祈りとを紡ぎ出し、神様にお伝えする、そんな1週間を過ごして参りましょう。祈りの言葉を整えることで、私たち自身の気持ちも整い、その祈りは神様に届いて祝福に変えられるだけでなく、私たち自身の心と身体も良好になるかも知れません。そういう祈りの力も忘れないでいたいと思います。

それでは、気持ちを込めて、叫びはしないけど、叫びたいくらいの気持ちで、最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。あなたは、古くから人に「祈り」を教えられ、あなたと私たちの心を繋ぐ営みとして、今に至るまで耳を傾け続けてくださいました。今日、イエス様によって目が開かれた二人の物語を読みました。祈りの力を教える物語であったと受け止めています。どうか、神様、今を生きる私たちも、その目が開かれて、あなたの光を仰ぎ見つつ、期待を忘れず、日々の歩みを続けていくことができますように。導いてください。とくに今、希望を失い、自ら歩むことを止めようとしている人のところに、あなたが行って、その足を支えてください。まだまだ捨てたもんじゃないと思って、世界中の人が明日へ向けた一步を踏み出すことができますように、どうかお願いを致します。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。